週刊ポスト 2018.5.7(A)発売号

名曲カルテ

昭和歌謡といつまでも

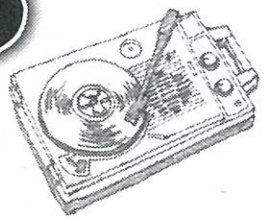
堀井六郎
絵・松本 浦

第33回 ザ・ピーナッツを大人の女性に変身させた名曲

作詞家・岩谷時子の『作品集』というタイトルの2枚組CDが10年ほど前に発売されていますが、全49曲中、冒頭を飾るのが『ふりむかないで』『恋のバカンス』『ウナ・セラ・ディ東京』の名作群でした。

収録曲が歌手ごとに構成されているとはいえ、ザ・ピーナッツの代表曲といえる3作品から始まること自体、岩谷とピーナッツのつながりの深さが印象づけられるとともに、そこにはもう一人、岩谷とともに二人三脚で歌謡曲の新しい世界を切り開いた作曲家・宮川泰のうれしそうな顔が見えてきます。

昭和37年2月に発売された『ふりむかないで』は、ピーナッツの21枚目にあたるシングル盤でした。それまでほとんど、欧米ポップスのカバー曲やクリスマスソング、映画『モスラ』の挿入歌などを歌っていたピーナッツでしたが、この曲のヒットによって、『私と私』(詞・永六輔、曲・中村八大)、『若い季節』(詞・永六輔、曲・桜井順)といったオリジナル歌謡の流れが生まれ、そして洋風歌謡曲の代名詞となった『恋のバカンス』へと行き着くことになります。



「歌謡ポップス」の嚆矢といえる『ふりむかないで』は岩谷・宮川コンビとしては3作目にあたるピーナッツへの提供作品ですが、宮川はポール・アンカでお馴染みの『ダイアナ』を聞いて、「こんな曲なら自分でもできる」と豪語して作曲したそうです。『ダイアナ』は循環コードを使用した典型的かつ代表的なオールディーズ・ソングですが、循環コードだからといって侮ることなかれ、実はこうしたシンプルなコード進行で作られた曲ほど作曲家の才能・技量が問われるようなもので、両曲とも作者の資質がわかりやすい形で発揮されている傑作だと思います。

『ダイアナ』が米国で大ヒットしたのは昭和32年、日本のロカビリーブームの中、山下敬二郎のカバー盤が発売されたのが翌昭和33年なので、『ふりむかないで』発売まで4年ほどのタイムラグがあります。

宮川によると、坂本九の『上を向いて歩こう』の「あーるこホホホ〜」の唱法をピーナッツに真似させたそうですが、『上を向いて〜』と同時期にかけて洋楽のヒットチャートをにぎわせていたのが、ヘレン・シャピロの『悲しき片想い』やコニー・フランシスの『夢のデイト』だったことから、「ふりむかなハハハいーでー」や「Yeah, Yeah, Yeah, Yeah」の歌唱部分に英米女性シンガーたちの影響が現われているような気がします。

「タータンチェックのスカート」や「黒い靴下」が男心をくすぐることを熟知した岩谷の歌詞が、ピーナッツの二人を、ちょっぴり妖しい魅力を放つ大人の女性へと変身させ、おそらく短時間で作られたであろう作品を手にした一卵性姉妹が、空前絶後の女性デュオへと孵化する瞬間を、冒頭のCDが体感させてくれます。

ほりい・ろくろう　昭和27年東京都生まれ。慶應義塾大学文学部卒業後は25年にわたる出版社勤務を経て独立。現在は出版社経営の他、ライターとしても活躍。著書に『私的「昭和大衆歌謡考」』第1〜3集（グスコー出版）がある